

## 石油埋蔵量の分布変化と石油戦略

渡部 喜智

### 初の首相の中央アジア2カ国訪問の意味

小泉前首相は、8月末に歴代首相として初めて中央アジアにあるCIS2カ国(カザフスタン、ウズベキスタン)を訪問した。退陣前に相当な数の外交日程をこなしていたから、両国訪問もそのなかの一つという程度でしか捉えられていないようだが、首相としての初の中央アジア訪問には二つの点から大きな意味を持つ。一つはロシア、中国に接し中東の外に広がるユーラシアのイスラム圏の外延部分としての地政学的意味合い。

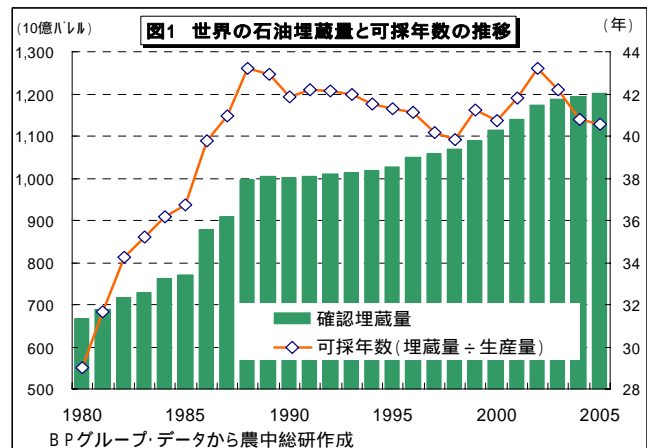
もう一つは近年の石油など豊富な天然資源の発見によりもたらされた資源確保の意味合いである。中央アジアは石油資源という意味でもホットゾーンであり、首相訪問は退陣直前の「外遊」ではなく、正に将来に続く橋頭堡を築く戦略的意味があったのだ。原油相場が7月中旬の最高値から調整し安心感も出ているが、本稿では石油資源の将来という点から、石油埋蔵量の動向とその世界的分布の変化に注目したい。

### 中長期的には石油枯渇論の信憑性には疑問

油田ごとの確認埋蔵量(以下、埋蔵量)の推定には難しさがあり、かつ公表データも制約されていることから差異がつきまとうが、本稿では公刊されかつ歴史もある点から英国BP社のデータによる。

まず、本データで確認しておきたいことは原油生産量=消費量も増えているが、埋蔵量も増加し続けていることだ。世界の石油埋蔵量は、1980年に6670億バレルだったのが、2005年には1兆2000億バレルへ約1.8倍に増えた。

かつ、埋蔵量を生産量で割った「可採年数」(現在の生産量が何年採掘できるか、石油資源の利用の目



安)は、新興国の需要増加によって底上げされてきたことも手伝い世界全体の生産量の増加幅も大きくなっていることから、さすがにピークに比べればここ数年低下しているが、05年も40.6年と40年台の大台をキープしている。これは、2次にわたるオイルショックを契機に油田開発に拍車がかかった80年代に比べて相当高く、高水準である(図1)。このようなデータから見ると、超長期的には別として中長期的には石油枯渇論の信憑性は低いと言える。

やや古いが、英Economist誌(05年5月30日)の論考を参考にすれば、技術革新の進展によって試掘成功率がかつての1/6から最近では2/3に大きく上昇しているという。軍事技術の転用である衛星やセンサーなどハイテク技術の活用が広がっている。また、近年の原油高騰によって、産油国やメジャーをはじめとする石油会社がキャッシュフローを増し、コスト的に見合わないを手をつけられなかったところを含め新規油田開発と既存油田の整備のための投資が増えている。さらに既存油田の採収率もコンピュータ管理などが進み、管理がきめ細かく行われることになり、向上しているという。技術進歩と最近における石油資源への

開発投資の増加によって、世界の石油埋蔵量の増加ペースが加速する期待も持てるだろう。

### 変化する石油埋蔵量の分布

では、問題・課題は何か。世界全体の確認埋蔵量が増えていても、その増加が世界のどこで生じているか、その分布の変化が問題となる(表1)。

石油埋蔵量の分布の6割以上を中東が占めている。そのシェアは90年代前半をピークに低下傾向にあるが、今もなお6割台をキープ。埋蔵量自体も1985年からの20年間で1.7倍に増加しており、石油生産地域としての重要性に変わりはない。

また、旧ソ連邦である、ロシアおよびカザフスタンなどCIS諸国の埋蔵量については96年以降でしか各国別データが明らかでないが、2000年以後の埋蔵量の増加は目覚ましい。ロシアが596億バレルから744億バレルに増加したほか、前述のカザフスタンが250億バレルから396億バレルに6割増加したことなどにより、旧ソ連邦地域のシェアは1割を上回っている。さらに、アフリカ地域もリビア、ナイジェリア、アルジェリアのOPEC加盟3カ国の埋蔵量を中心に増加を見せ、そのシェアは約1割となっている。

これに対して、米国の埋蔵量シェアは2.4%に低下し、埋蔵量も20年間で6割程度に減少した。可採年数は12年程度に過ぎない。前述のように埋蔵量は固定的ではなく新油田の発見や既存油田の採収率向上などで変化する可能性もあるが、米国の日量20百万バレルを超える(05年:2066万バレル)石油消費を考えると、国内埋蔵量を温存しつつ、自国資本による石油権益を拡充することは重要となっている。また、北海油田をかかえる西欧諸国の埋蔵量も減少を辿っている。

一方、中国も埋蔵量は増えておらず、国内での開発強化と並んで、米国同様に海外調達を充実すべく権益拡大に力を注いでいる昨今である。

このような埋蔵量分布の変化を踏まえ、わが国においても、調達の9割を占める中東地域との安定的関係の維持とともに、海外での石油資源開発の多様化と強化は重要な国家的課題といえよう。

このように埋蔵量分布の変化を踏まえ、わが国においても、調達の9割を占める中東地域との安定的関係の維持とともに、海外での石油資源開発の多様化と強化は重要な国家的課題といえよう。

表1 世界の石油埋蔵量の地域分布

(単位: 10億バレル)

項目	1985	1995	2000	2005	埋蔵量の世界シェア(%)	85-05年の変化(倍)	可採年数
<b>北米合計</b>	101.5	89.0	75.6	59.5	5.0	0.59	11.9
うち 米国	36.4	29.8	30.4	29.3	2.4	0.81	11.8
うち カナダ	9.6	10.5	18.3	16.5	1.4	1.73	14.8
<b>中南米合計</b>	62.9	83.8	97.9	103.5	8.6	1.65	40.7
うち ベネゼエラ	54.5	66.3	76.8	79.7	6.6	1.46	72.6
うち ブラジル	2.2	6.2	8.5	11.8	1.0	5.43	18.8
<b>欧州およびCIS合計</b>	78.6	81.5	114.1	140.5	11.7	1.79	22.0
うち ロシア	n/a	n/a	59.6	74.4	6.2	-	21.4
うち カザフスタン	n/a	n/a	25.0	39.6	3.3	-	79.6
うち ノルウェー	5.6	10.8	11.3	9.7	0.8	1.74	8.9
うち アゼルバイジャン	n/a	n/a	6.9	7.0	0.6	-	42.4
うち 英国	5.6	4.5	4.7	4.0	0.3	0.71	6.1
うち デンマーク	0.4	0.9	1.1	1.3	0.1	2.86	9.3
うち イタリア	0.6	0.7	0.8	0.7	0.1	1.24	17.0
うち ウズベキスタン	n/a	n/a	0.6	0.6	0.0	-	12.9
うち トルクメニスタン	n/a	n/a	0.5	0.5	0.0	-	7.8
<b>中東合計</b>	431.3	661.5	691.0	742.7	61.9	1.72	81.0
うち サウジアラビア	171.5	261.5	262.8	264.2	22.0	1.54	65.6
うち イラン	59.0	93.7	99.5	137.5	11.5	2.33	93.0
うち イラク	65.0	100.0	112.5	115.0	9.6	1.77	*
うち クウェート	92.5	96.5	96.5	101.5	8.5	1.10	*
うち U A E	33.0	98.1	97.8	97.8	8.1	2.96	97.4
<b>アフリカ合計</b>	57.0	72.0	93.4	114.3	9.5	2.00	31.8
うち リビア	21.3	29.5	36.0	39.1	3.3	1.84	63.0
うち ナイジェリア	16.6	20.8	29.0	35.9	3.0	2.16	38.1
うち アルジェリア	8.8	10.0	11.3	12.2	1.0	1.38	16.6
<b>アジア大洋州合計</b>	39.1	39.2	42.6	40.2	3.4	1.03	13.8
うち 中国	17.1	16.3	17.9	16.0	1.3	0.94	12.1
うち インド	3.8	5.5	5.3	5.9	0.5	1.57	20.7
うち インドネシア	9.2	5.0	5.1	4.3	0.4	0.47	10.4
<b>世界合計</b>	770.4	1,027.0	1,114.7	1,200.7	100.0	1.56	40.6

(BPグループ・データから農中総研作成)